

「雲南の新嘗から日本の大嘗祭を見る」【サマリー】

欠 端 實

雲南省南部に居住するハニの人々も日本人も共通して照葉樹林の中で文化を形成してきた。照葉樹林文化圏の中で稲作を開始し、やがて稲を自らのアイデンティティーとした。そこで小論では、ハニ族文化と日本文化の比較を通して、日本の大嘗祭の起源を考えてみた。

ハニ族と古代の日本人の共通点として指摘できるのは、①自分たちと稲とは祖先を同じくすること、②したがって自分たちは稲魂の子孫であること、③稲魂は女性であること、④祖先を祀る場所と稲を祀る場所は祖先棚（日本の場合は御倉タナ）であること等々である。

大嘗祭を考える上で重要なのは、ハニ族の場合、祖先棚での祭祀は独占的に家長が主催し、家長が亡くなった後の最初の新嘗の日に、祭祀を継承する子供たちがはじめて新たに祖先棚を自分の家に新設することができる点とされている点である。

日本の大嘗祭は、新嘗の日に、皇位を継承した新天皇が悠紀田・主基田（理念的には全国の水田を意味する）の稲魂を迎え入れ、皇祖アマテラスと新米を共食し、稲魂を継承しようとするものである。このように見れば、ハニ族の祖先棚の祭祀権の継承と、日本における新天皇による大嘗祭には共通性が強く見られる。